

ヒロシマ・ノワールを思考する／ 東琢磨氏をむかえて

第一部 発表

田尻歩 「出来事としての写真と体験されたことのないものについての「記憶」—笹岡啓子の『Remembrance』と『Park City』

片岡佑介 「原爆映画におけるマリア像と母の歌について—熊井啓『地の群れ』を中心に」

白木三慶 「ハリウッド・ノワール—*The Day of the Locust* における破滅の社会批評をめぐって」

応答 東琢磨

第二部 東琢磨『ヒロシマ・ノワール』をめぐって

書評 有坂美紀、吉田裕、井上間従文

応答とトーク 東琢磨

東琢磨：音楽批評・文化研究。広島市在住。著書として『ヒロシマ・ノワール』（インパクト出版会、2014年）、『ヒロシマ独立論』（青土社、2007）、『違和感感受装置』（冬弓社、2004）、『全—世界音楽論』（青土社、2003）など多数。

2014年6月24日（火） 16時～20時
一橋大学 言語社会研究科（国際研究館） 5F 共同3教室
予約不要、入場無料

科学研究費補助金 若手研究 (B) 「20世紀後期の環太平洋とアメリカ文学・映像文化:記憶と主体の生成変化」
問合せ：m.inoue@r.hit-u.ac.jp